

「君って、色気がないねえ」と、言われたことがある。その言葉に、バツサリと傷ついた。「色気」とは何か、ずいぶん悩んだ。今も、それは私のコンプレックスだし、「色気」というものは、私の手の内にはない「魔法」のように思える……。

さて話は変わるが、毎年三月になると、母は「あかりをつけましょ、ぼんぼりに……」と、「うれしいひなまつり」を口ずさみ始める。もう数年、飾っていないけれど、わが家のお雛様は、ガラスケースに入った小さな五段飾りである。私の初節句に父が買ってくれたそうで、小ぶりながらも、三人官女が手に捧げ持っている酒器や柄杓も、五人囃子の鼓や太鼓なども、ちゃんとそろっていて愛らしい。

そしてこの季節、私は、お菓子屋さんやスーパーの棚に置かれる「雛あられ」の袋に手を伸ばさずにいられない。

雛あられは元々、女の子の幸せと健康を祈願するためのものだったそうで、うるち米を膨らませたあられを、お砂糖でうつつら甘く味付けてある。色も、白は雪、緑は芽吹き、ピンクには生命という意味が込められているそうだ。

その意味など知らぬ幼い頃から、私は雛あられが大好きだった。うつつらお砂糖のかかった雛あられは、まるでスイートピーのような淡い色をしている。白・緑・ピンク・黄色……。その色を見ているだけで、春の光の中にあるように、ふわふわと幸せな気持ちになれる。

あれだから、中は空気だけ。軽くて、口に入ると、サクッと砕け、ほのかに甘い。そして、食べても食べても、お腹にたまらない。まるで夢を食べているようだ。

それにしても、女ものは、どうしてこんなに美しい色に満ちているのだろう。デパートの売り場に行っても、婦人物の売り場は、色彩が華やかで一目で男ものとの見分けがつく。絹のスカートも、マニキュアや口紅も、下着も、まるで花畑の中にいるようだ。

私は幼いころから色に夢中だった。美しい色が並んでいるのを見ると、なんだか目がとろけそうになった。母と

Taste
of
the Season vol.20
text by Noriko Morishita
illustration by Mizue Hirano

雛あられ、 夢の色

エッセイスト 森下典子

一緒に、商店街の手芸用品店に入り、刺繍糸や毛糸の並んでいる棚の前に行くと、まるで甘いお菓子を舐めるように、色のグラデーションを眺めて、陶然となった。大人になって、着物を着るようになってからは、長襦袢や、美しい帯揚げを見ると、その色の中に溺れたいと思った。

そういう時、自分の中に、何か抗いがたい「欲」のような「本能」のようなものがよぎるのを感じる瞬間がある。ひよっとすると、そんな本能の赴く彼方に、「色気」という人生の魔法はあるのだろうか……。

私たち女性は、子どものころから色をエネルギーにしている。美しい色をまとい、肌から「色」を食べていると言ってもいい。女の子の健やかな成長を祈願したという「雛あられ」は、まさしく「色の食べ物」だ。あのスイートピーの様な甘美な色は、きつと、大人の女性になるための、女の子たちの心の栄養なのだ。

もりしたのりこ／神奈川県生まれ。横浜市在住。日本女子大学文学部国文学科卒。『週刊朝日』の名物コラム「デキゴトロジー」のライターを経て、エッセイストとなる。主な作品に、『日日是好日』『猫といっしょにいるだけで』（新潮文庫）、『いいいたべもの』（文春文庫）など。近著に『好日日記―季節のように生きる』（パルコ出版）、『こいいたべもの』（文春文庫）がある。